

アメリカ禅センターの思い出

第六、七回生 沖田 玉映

(福井県玉泉寺住職)

此の度、善光寺留学僧育英会・第三十回を迎えられ心からお慶び申し上げます。育英生は全百十六名に数え黒田武志老師様、そして嗣法の博志方丈様の並みならぬご尽力の賜物と只々、頭の下がるおもいでございます。小尼が平成二・三年、特に継続のお許しを頂き、二年間アメリカ禅センターへ修行の勝縁に恵まれましたことは、日を重ねれば重ねるほど千載の一遇と感謝せずにはいられません。改めて当時の事を思い出してみますと、早、二十七年の星霜を経ていることに驚き色々なことが湧き上がってまいります。何と申しまして黒田武志老師様・前角博雄老師様に相見し法導賜り、心の財産になっています。しかし思いもかけず両老師が六十代にて余りにも早く遷化され、最初は信じられなく、受け入れられませんでした。黒田武志老師は若い頃、名前の如く大きな夢をお持ちになられ艱難辛苦をされながら、無一物から現在の善光寺を築き上げてこられたと拝察します。同様に前角老師もまた戦後、日本が経済的

に豊かでない時代に開教師として渡米し、人には言えないご苦勞をされ今日を築き上げてこられたことでしょう。日本と違い目上の人に対して大変フレンドリーに接しながらも前角老師に對して、メンバーの方々はとても尊敬信頼の念をもって接している様子がわかりました。禪の指導以外に、個人的な相談にも嫌な顔をせず耳を傾けて、本当に多忙きわまる鉄の様なお体の持ち主でした。時折、小尼が煮物等日本の香りをする料理を作って差し上げると、にこりとされ嬉しそうに召し上がっていたお姿が懐かしく思い出します。平素より質素にされ日本茶さえ出廻らしになっても大事に飲み干されていらつしやいました。折しも丁度、お氣の毒にご生母様が九十歳の天寿をまっとうされ、ご葬儀を済まされて日本よりお戻りになられた時、お悔やみを申し上げましたら、薄ら目に涙を浮かべ「淋しくなりました」と一言いわれ、遠路にいるほど心配でならなかった母を想う気持ちが伝わり、あのエネルギーの鉄の様な前角老師からお優しい心を感じました。

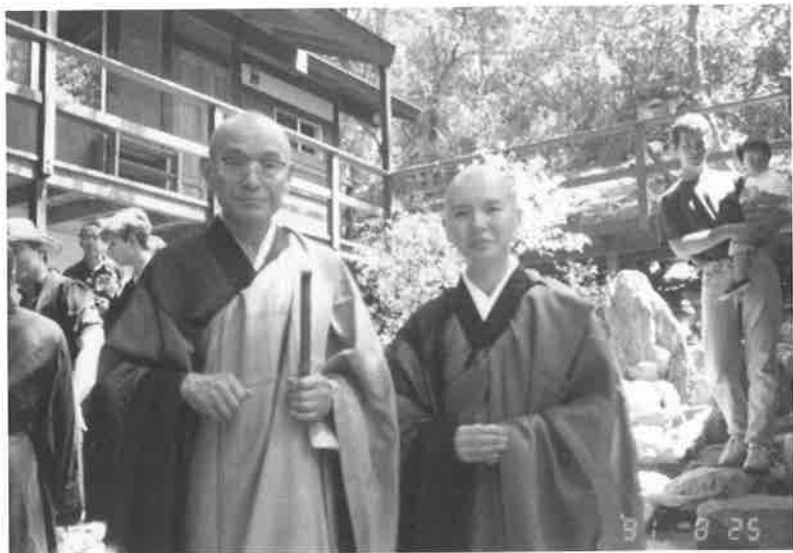
そして前角老師のご好意により法系の異なる禪センターへニューヨーク・サンフランシスコ・ミネソタ、そしてメキシコへと安居（修行）或いは摂心会に参加させていただきました。持参の応量器（僧侶の食器）に日本では御飯・粥以外、よそわないのに、ここではお粥の代わりにシリアルをよそい、牛乳・蜂蜜・ヨーグルト・ピーナツバターを中に混入し、なぜか自分が

戒律を犯したような大変なことをしている気持ちに陥りました。

本来、応量器の応ずる意味は「自由無礙に執着せずに応じること」ここは米国、米国は米国と、些細なことに驚いて、いてはいけないと気を引き締めたことを今思い出すと懐かしい限りです。「同じ釜の飯を頂く」諺のとおりメンバーと同じ食住の和合生活（修行）をしていくと、自然に仲間意識が芽生えて、色々和外見では解らないことを垣間見えてきました。同じ人間として個と個の絆に変化して、それは信頼という一つ一つの丁寧な行為の積み重ねによるものとなりました。何処のメンバーも問題や悩みを抱えながら精一杯に明るく生きている姿に心を打たれ、単なる形だけの禅が受け継がれているのではなく、まさしく、道元禅師様の説かれた、生きている禅が現成していると感じました。

黒田武志老師様・前角博雄老師様のご苦勞された恩恵を頂いたお陰により、日本にいては解らない色々なことを学びさせて頂きましたことを深謝申し上げます。お世話になりました大勢のメンバーは如何されていらっしゃいますか、風の便りにご活躍されていると聞きますと嬉しくなります。拙文にて申し訳なく陳謝し、末筆ながら当会の益々のご清栄を祈念申し上げます。

合掌



(上)『文藝春秋』平成2年6月号 PEOPLE 掲載

(下)ZEN マウンテンセンター陽光寺にて夏安居